

◆第17話◆ 建学の精神と自校史

自校史編纂の目的は、拓殖大学創立百周年記念式典における明仁上皇陛下のおことばにある「過去に学び、良き将来を模索する」ところにあるともいえる。また、自校史は、「建学の精神の発露」媒体ともいえる。

自校の沿革を纏める作業は、「建学の精神が創立以来現在に至るまでどのように実現されてきたか、を表現する作業」ともいえるだろう。創立者が考えた建学の精神がそっくりそのまま50年、100年何の変化もなく・・・というのは、考えにくいものである。その時代、社会の変化や要請ということもあって、建学の精神は、少し変容することは、許容されるべきである。では、建学の精神について、ひとつ昭和20年の大変動を例に考えてみよう。敗戦という契機は、天地が逆さまになるという表現がぴったりだ。それまで、国内では、是とされたことがすべて否となった。当然、建学の精神は、変えたくないが、大学自体が存続できるのかどうか不安になるような社会情勢であったはずだ。事実、拓殖大学では、廃校の噂（デマ）が渦巻いた。その経緯と証拠は、『拓殖大学百年史 資料編五』に詳しい。この本の編纂をする過程でわかってきたのは、GHQ/CIEが我が国の大学廃校を積極的に検討してはいなかったということである。拓殖大学は、ひとりの教職追放者も出していない。永尾策郎など植民学をはじめとする侵略幫助と目される教科の教員は、敗戦と同時に退職していた。同時期に立命館大学では、2番までであった校歌の歌詞が1番のみとなっている。正式に校歌の2番が廃止されるのは、後のことである。

拓殖大学の『同窓會報』第6号（明治44年6月30日、東洋協會専門學校同窓會）掲載の「校風論」（在学 橋本白秋）から抜粋する。

次に校風の建設に欽くべからざる二つの要素がある

一つは偉大なる人格で他は是に感化され統一され同化さるべき學生である學校が一つの脩養團體である時に若し其上に立つべき其の中心となるべき一つの偉大なる人格があるならば此の團體は人格の感化と統一とによりて其特色を自己の特色となすことが出来る換言すれば團體としての特色は該人格の反映である新島先生の下に於ける同志社、大隈伯の下に於る早稻田、福澤先生の下に於ける慶應義塾クラーク氏を戴ける札幌農學校新渡戸先生を戴ける向ヶ岡に於けるは著じるしき實例である

[中略]

さて一旦建設され樹立されたる校風は如何にして維持發展さるゝか時勢は絶えず變遷する社會の思潮は一處に停滯するものでない即其人格は時に去り學生は年々退かねばならぬ比較的永久に残るは校舍制度ばかりである

[以下省略]

と述べている。二つ目の要素は、以前に引用したとおりである。校風（建学の精神ともいえる）は、人格によって作られ、感化されるところから始まり、伝承して初めて意味がある、というのである。

口伝ばかりの方法では、正しく伝わるとは限らない。それには、何か記録しておくことが必要になる。正史としての自校史は、まさにこのツールと言っていいであろう。